

直方ミニバスケットボールクラブだより

〈2020年度チーム最終号〉

よき別れをよき再会につなぐ



この一年をふりかえると

2021年3月21日（日）をもって6人が卒部し、今年度のチームの活動のすべてが終了します。今年度は、一年中コロナ禍での活動となりました。6月までは活動できず、6月中旬からようやく活動を再開することができました。感染対策を講じながら、恐る恐るの活動再開でした。はじめは個別練習を中心に、最後に短時間のゲームという活動内容でした。

新型コロナウイルスの感染状況は、第2波、第3波を含めて、地域によって浮き沈みがありましたが、全体的には、少しずつ個人からチームへと活動内容を広げていきました。しかし、期待していた大会は、各主催団体の判断でことごとく中止になり、日々積み重ねてきた練習の成果を発揮する場は失われてしまいました。

そんななか最後のチャンスにかけて、3月6日（土）に小さな自前の大会ではありましたが、「直鞍遠中地区ミニバスケットボール教育リーグ お別れ交歓大会」を開催することができました。1チーム2試合ずつで日頃の練習の成果を試す試合を実現することができました。そして、ゲームを通してチームになった姿を見せてくれました。

ここに至るまでには、子どもたちの貴重な学びの積み重ねがありました。ただ、学びには揺れが生じます。その揺れが大きいとしんどいこともあります。揺れがあるから貴重な学びになります。その揺れを子どもたちなりの解決方法で、子どもたちなりに解決することができたとき、その子たちに貴重な力が備わります。もちろんサポートは必要です。私は、子どもたちの力を信じて交通整理の役割を担いました。そのなかで、子どもたちが自分たちで問題を解決していきます。一定、時間がかかるし、根気もいりますが、子ども自身に力をつけるには、この時間が必要で、それが貴重な学びの時間になります。今年度もその瞬間に立ち会うことができ、子どもたちと“教育（共育）”の感動をともに味わうことができました。

そこを乗り越えた一人ひとりの力が土台となり、チームとして大きな力を発揮することができたのが、お別れ交歓大会でした。子どもたちにとって自信になったでしょうし、これまで取り組んできたことへの納得につながったのではないかと思います。

子どもの学び

クラブは、複数かつ異学年の子どもたちが、時間と場所を共有して活動しており、

ある意味、社会生活を営んでいる、といえます。人が社会生活を営むということは、その関係性において問題が生じることは、当然あります。人と人の間で存在するのが“人間”ですから。その問題は、子どもたちにとって、おとなに成長する過程での貴重な学習材です。問題に遭遇しないというのは、学びの機会がないともいえます。ちょっと専門的な用語になりますが、学校教育には「問題解決学習」という言い方で、それを重要視した取り組みがあります。教科学習を含めて、さまざまな教育場面で主体的に学ぶ力を育むために取り組まれています。子ども自身が問題をとらえ、それを解決するための方法を考え、実践にうつす力です。

そこをどう保障するか、教師（指導者）のかかわりが重要になります。適切にかかわることと待つこと、これを交互に繰り返しながら解決に導くということで、時間もかかるし、根気も必要です。見ていると、いらいらして、ついつい、先に先に介入し、指導したくなるのですが、それでは、生涯にわたる生きる力としての学力が子どもにつきません。ここの学びをどうつくっていくかが教師（指導者）の重要な役割です。それを表す言い方として「教えずに教える」という言い方もします。直方ミニバスケットボールクラブがテーマとしている「自分（たち）で考え判断し行動する」は、このような理念からきています。

学校で事が起きたことに対する私の役割と、直方クラブで事が起きたことに対する私の役割と、子どもたちの家庭で事が起きたことに対する私の役割は、当然違います。同じように、学校で事が起きたことに対する親の役割、クラブで事が起きたことに対する親の役割、家庭で事が起きたことに対する親の役割も違います。

クラブの指導に関しては、私と指導スタッフ（コーチ）が責任をもって対処さっせてもらいます。親の立ち位置は、常々お願いしている「見守り、励まし、応援する」です。そこそこで責任をもつべき者が、責任をもって子どもに対処することが大切で、周辺の関係者は、「見守り、励まし、応援する」というサポーター的な機能を発揮することが重要です。

「よき別れは、よき再会に」

6年生6人、それぞれが、最後まできっちり活動をやり遂げてくれました。それがいい別れ方の条件です。「よき別れは、よき再会」につながります。節目でちゃんと「お別れ」ができていないと、再会することも難しくなります。

人は、「人との出会い」が、その後の人生に大きな意味をもつことも少なくありません。同じ時代に、同じ時を過ごし、同じ場所で汗を流し、ともに努力を重ね、最後までやり遂げた事実とそこで育んできた人間関係は、その後の人生においても貴重な財産になります。

私たちおとなの役割には、一人ひとりの子どもに、できるだけ多くの“人（つながり）”と“学び（経験）”という財産を残してあげることがあります。直方クラブはバスケットボールクラブですが、バスケットのプレー技術を身につけることだけを追い求めているクラブではありません。

直方クラブになって20年が経過します。すでに多くの子どもたちが卒部しています。そして、毎年、複数の子どもたちが体育館にもどってきて後輩たちと汗を流してくれています。すでにおとなになって、もどってきてくれている教え子もいます。現コーチの二人もそうです。また、親になって、わが子を入部させてきてくれている教え子もいます。もちろん、直方クラブ以前のかかわりの教え子もいます。いずれも、ミニバスケットボールクラブや学校での出会いを通じて、「よき出会いーよき別れーよき再会」となっています。

「ヒトは人との間で人間になる」

「人間は社会的動物」と言われます。「ヒトは人との間で人間になる」とも言われます。ヒトは人との関係のなかで社会性を育み、人間としての豊かさをもって生きていくことができるということです。バスケの活動を通じて、多くの子どもたちがともに学ぶなかには、活動で生じるさまざまな問題を、自分（たち）で考え、人の意見に耳を傾け、参考にしながらも、最終的には自分で判断し行動する、ということがあります。そのことによって出てくる結果は、たとうまくいかなかったとしても、それを人のせいにせず、自分（たち）でうけとめるためです。自分（たち）でうけとめることができる子は、自分（たち）で自分（たち）をふりかえり、人の意見にも耳を傾け、反省し、課題に気づき、その解決方法を考え、また次の行動にうつしていくことができます。「考える力をもつこと」「人の意見に耳を傾ける力をもつこと」「自分で決める力をもつこと」「自分で行動する力をもつこと」、これが学びのプロセスです。“自分に勝つ”ということは、このプロセスを歩むことです。直方クラブ発足当初から掲げているモットー“自分に勝て”の意味です。

進学、新級した子どもたちが、次のステージで、このプロセスを力強く歩む姿に期待し、今年度の活動を終えます。そして、明日から、それぞれが、また新たな一歩を歩みはじめます。次は中学生としてもどってきて、後輩と汗を流してくれる姿を楽しみにしています。

